蘇芳集

子供の日

青山　丈

つまらない日に行き当たる花筏
飛び下りる道ぎしぎしの中にあり
踏切の棹の雨垂れ四月尽
苗木市橋の袂で終りけり
昼食べたばかり八十八夜かな
葉桜になりて間のなき木蔭かな
子供の日日暮れて二階より下りる

春愁の

木内憲子

晴れ兆すどこから見ても肥後椿
啓蟄の水がをどつてゐるやうな
春落葉ことをなさむに何足らぬ
春愁の膝の上に書くわづかかな
靴ひもを結ぶ燕の来るころか
連翹を過ぎてしばらくしあはせな
三月の白紙さくさく揃へけり

大井ゆめの里

小島　みつ如

「ゆめの里」河津ざくらのまつ盛り
さくら東風つよししがみつきゐて幹
見下ろしていささか花に濃淡も
さくらに風まるで友禅流しかな
心をどる春雪の富士雄大よ
お雛さまへ買ふ出来立ての菱餅を
山くだる花のおぼろを引きずりて

籠り癖

清水裕子

二ヽ月の蝶翔つ草の色に翔つ
ひともとに心寄せ合ふ初桜
舞殿の紙垂風に二月尽
気紛れな風に落花の二三枚
開店に春が後押し人の波
パン購て帰路も傘さす花あしび
籠り癖つけば気怠し夜の梅

牡丹の芽

下平直子

光りつつ母の容に春の雲
鶯や颯とあがりし森の雨
耕人の口遊みゐる恋の唄
雨あとの光こぞれり牡丹の芽
青柳や湖に夕日のゆきわたり
雲雀野や始発電車が東京へ
胸深く仕舞ひし一事薔薇芽吹く

ふたたび椿

冨田正吉

一度見て二度見て三度見て椿
あまだれの椿のいろとなりにけり
あざやかな時間の中の椿かな
椿見て頭くらくらしてゐたり
なつかしき時間の中の椿かな
白椿目鼻痒くてならぬかな
目が痛くなるまで椿見てゐたり

絵本

野路斉子

祝ぎごとが転がるやうに蝶急ぎ
欲しきもの絵本ばかりの薔薇咲いて
掌を開く橡の若葉に誘はれて
一花とて俯くはなし橡の花
草矢には草矢作りて母抗戦
かたつむり程には雨は好きでなく
道かと思ふ病葉の降る静けさに

落ちてなほ

前田　陶代子

けふ鞄軽きと思ふ初桜
不意に音たつ三月のししおどし
白梅に紅梅に日の高くあり
落ちてなほ炎立つが如き肥後椿
柔らかきシャツ着て彼岸お中日
沼波に添うて春愁深くしぬ
川曲るところに鳥や春深し

山国

峰岸　よし子

鳥ぐもり沖の潮目のむらさきに
和綴ぢ本くくりてかろし桃の花
山国の風まだ固き種選び
竹の根のあらはに春の風邪ごこち
春の鮒身をよぢのぼる野川かな
紅梅の日向の会釈かぐはしや
あめつちの中枢暗むぼたん雪

春ショール

宮尾　直美

うぐひすや水車はひかり汲みこぼし
走り根の太きを称へ西行忌
春満月何処かで救急車が止まる
初蝶や若さは毬の如きもの
春暁の夢の端なる雨の音
川舟の灯して戻るいたちぐさ
掛けてみて何処にもゆかぬ春ショール

花を訪ねて

八木下　末黒

父母を憶ふ空なり辛夷咲く
だんだんに空重くなる揚ひばり
居るはずの人を見ぬ日の桜かな
庭園の灯影の青く山さくら
水を見て花を訪ねて日暮かな
対岸の男ばかりの花見かな
一枝だに無駄無く枝垂桜かな